

定植までの管理を省力化できる 種子繁殖型イチゴ「よつぼし」

種子繁殖型イチゴ品種「よつぼし」は、種子で増殖できることにより、苗生産と果実生産の分業化が可能な品種であり、親株管理や採苗、育苗労力の削減に多大な効果が期待されています。そこで、岩手県農業研究センターでは、促成栽培における「よつぼし」の特性や導入効果について明らかにしましたので、その概要を紹介します。

☆ 技術の概要

1. 二次育苗法の特性及び導入効果

- 1) 406 穴のセル苗を購入しポリポットに鉢上げするため、親株管理が不要となり、定植までの作業労働時間は慣行栽培（栄養繁殖型品種）に比べ約 28%削減できます（図 1）。
- 2) 総収量は「さちのか」より多い傾向ですが、「紅ほっぺ」より少なくなります。花成促進処理を行わない場合、頂花房開花期は「さちのか」に比べ最大で 1 か月程度早まります。
- 3) 所得は、慣行栽培の「さちのか」に比べ約 2 倍の 150 万円となります。

2. 本圃直接定植法の特性及び導入効果

- 1) 200 穴セル苗を購入し本圃に直接定植するため、親株管理のほか採苗、育苗が不要で、定植苗が小さく定植時間も短縮できるため、定植までの作業労働時間は、慣行栽培に比べ約 86%削減可能です（図 1）。
- 2) 総収量は定植期により大きな違いがないため、定植期の分散が可能です。
- 3) 二次育苗法に比べ省力性が高く、定植期の分散が可能なため、他の夏秋どり品目との組合せ栽培が可能です。

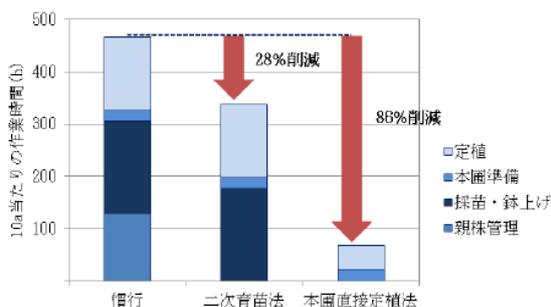


図 1 定植までの作業労働時間

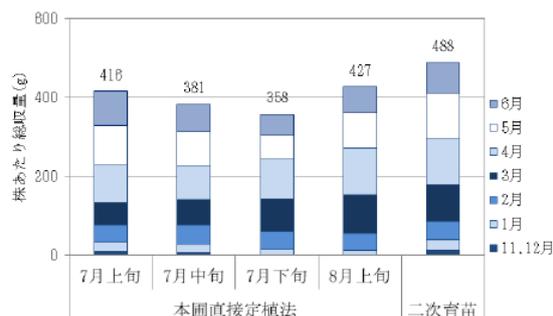


図 2 本圃直接定植法の定植時期とそう収量の関係

☆ 活用面での留意点

1. 本圃直接定植法では、総収量が二次育苗法より少ない傾向にあります。また、6月以前の早植えは奇形果多発につながる恐れがあるため注意が必要です。
2. 本試験は革新的技術開発緊急展開事業により実施されました。
3. 詳しいことは、岩手県農業研究センター 園芸技術研究部 南部園芸研究室（TEL:0192-55-3733）までお問い合わせください。